

説

苑

私が見たアメリカ合衆國

(昭和五年十一月小樽市教育會主催講演會講演)

南 亮 三 郎

(一)

およそ世界の歴史は、相對立するものゝ克服をもつて進行する。

吾々の現に住みつゝある世界には、この歴史の發展過程上に一役を演ずべき數多き力が併存する。しかし、そのうちの最も主要なるもの、同時に現在の世界を本格的に特色づけてゐるものは、しばらくラッセルの用語を藉りれば、Industrialism と Nationalism との二つである。この二つの力は、時には相結合し時には相反撥して、

私が見たアメリカ合衆國

世界をば不斷の鬭争過程中にひき入れしめる。それはまことに、人類の近代史が生みおとしたところの双生の怪物である。

ところで、この Industrialism と Nationalism とには、それぞれ異なつた二つの形態がある。一は權勢の所有者のためにはたらしき、他は自からを解放せんがための鬭争の形をとる。したがつて前者は支配的地位にある階級または國民によつて代表せられ、後者は被支配的地位にある階級又は國民によつて代表せられる。資本主義と社會主義とはこれに應じた Industrialism の二つの形態であり、帝國主義と民族自治とは Nationalism の二つの形態である。

そこで吾々は現在の世界においては四つの大きい經濟的ならびに政治的の力をもつこととなる。Industrialism の二形態たる資本主義と社會主義、および Nationalism の二形態たる帝國主義と民族自治の四つである。世界における混亂状態はこれら諸力の間における均衡が破れたときに起る。しかしそれは四者互に相對立し合ふのではない。吾々の世界ではこの四つの力がそれぞれ二つの組合せをなして、劃然たる二大部類の對立を示してゐる。即ち一方には資本主義と帝國主義とが並び立ち、他方には社會主義と民族自治の要求とが並び立つ。――私が今、そこを旅した折の印象をたどつて語らうとするアメリカ合衆國は、いふまでもなくこの第一部類を代表するのであつて、そこでは資本主義と帝國主義とが最尖端にまで高揚されてゐるのである。

資本主義と帝國主義とは本來別個の概念である。即ち前者は經濟的、後者は政治的概念である。しかし本質

的にはこの兩者は別個のものではない。資本主義は一定の段階にまで發展すると必然に帝國主義の形態をとるに至るのであつて、それを動かす力は全く同じいと云へる。私のアメリカ物語は、それゆゑに、アメリカの社會を特色づけてゐる資本主義的文明の、漫然たる觀察をもつて始まる。

(二)

アメリカにも自然の變化はある。ナイヤガラ瀑布はなるほど大きいに違ひないし、ロツキイの山々は雲に聳えて居り、キャリフォルニアの海岸には金色の波が打ちよせてゐる。しかも、地質學者の云ふところによればアメリカは、すべての大陸のうちその構造の基線において最も簡單なるものである。これと同じやうに、その社會生活は表面上いかに多種多様な姿を示してゐるにしても、その多様性を貫いて見ると吾々は、アメリカの文明が大陸そのものゝやうに極度な構造上の簡單さをもつてゐることを看取することが出来る。その種類一萬數千に達してゐた自動車の部分品が二千百種類に、四十九種類あつた牛乳壘が九種類に單純化され標準化されてしまつたやうに、アメリカ人の生活それ自身もまた、單純化され標準化されつゝある。その簡單さ、或は標準化こそは、アメリカの文明が殆んど全く『事業家の文明』 *business man's civilization* となつてゐるとの事實に由來してゐる。何故であるか。

例をイギリスにとつてアメリカの場合と比較してみる。イギリスは常に一大商業國であつた、そして先世紀

の間は世界において最も進歩したる工業國であつた。イギリス人はヨーロッパ大陸の人々からは『shopkeeperの國民』とさへ云はれてゐた。今日でも商賣の上手なのはイギリス人と支那人とである。産業と貿易とは過去におけるイギリスの繁榮と力との礎石であつた。しかもイギリスの文明は、他日或ひはさうなるかも知れぬにしても、今日までのところはなほ、アメリカの文明と同じ意味においては決して『ビジネスマンの文明』とは云はれ得ない。理由は、實業家が社會の上に及ぼす影響が、實業以外の諸種の有力なる力の作用によつて著しい程度に制限されてゐるからである。

何よりも先づ、これについて語るべきは、封建制度の遺物——貴族主義が今なほ、長い傳統の力をもつてイギリス人の社會生活およびその觀念を支配してゐることである。分けても田園においては、土地紳士 *Landed Gentry* といふ貴族主義的觀念が非常に大きい勢力をもつてゐる。それはイギリス人としての生活の大きい目標でもある。だから、人は金をためると、ロンドンに大きい邸宅をかまへそこで高價な享樂に陶醉する代りに、彼れは先づどこかの田園で土地を買入れるのである。労働黨が天下を取つても上院の議席を占めることは如何なる労働者にも許されてゐないし、マクドナルドが創つた貴族はポールドウインが創るものと考へられたと全く同じ型の人々であり、今日まで植民地總督に任ぜられた人は、多數の空席あつたにかゝはらず、労働者出身としてはたつた一人あつただけである。これ即ち、イギリスを支配するものは今なほ古き貴族主義であるとさるゝ所以であつて、中世的な傳統の力がイギリス人の社會生活およびその觀念を如何に有力に左右しつゝある

かの一つの證左である。

ところがアメリカではこれがなかつた。尤も、舊大陸から渡來した最初の移住者達は、それぞれ母國からの制度や觀念を持つて來たに違ひない。しかしそれは、現代資本制社會の根本動力たる『合理の精神』の發動の前には全く無力であつた。それはこの精神の自由なる發動を妨ぐる桎梏とはならなかつた。合理の精神はアメリカにおいて初めて十全なる發現を見たのである。だから、ヨーロッパの國々においては長い年代の後に漸く部分的に行はるゝに至つたところの人間型における二段の轉化——すなはち、神と傳統とに仕ふる『中世型人間』から、金と産業とに仕ふる『ブルジョワ型人間』への轉化——が、またたくうちに完了されてしまつたのである。

それに加へてアメリカは豊富な自然の富源を持つてゐた。この豊かなる自然の特恵こそは、アメリカ今日の繁榮をもたらしめた第一位の原因である。アメリカは今日、世界の富のおよそ半分を所有するとさへ云はれてゐるが、試みに二三具體的な數字を拾ふてみると、國民の貯蓄預金が三十億ドルを突破し、年額百萬ドル以上の高所得者數が三百人に達しようとしてゐる。さうして國民所得の總額は一千億ドルと算せられてゐる。更に對外關係を一瞥すると、世界の主要國は殆んどすべてがアメリカに債務を負ふてゐるが、中につき巨大なるは大戦によつて生じたヨーロッパ諸國の戰時債務であつて、その額は無慮百十五億二千二百三十五萬四千ドルとなつてゐる。昨年一ケ年間にこれらの負債國からアメリカ政府が受取つた利子だけでも、一般債務からは一

億六千萬ドル、戦時債務からは九億五百萬ドルであつて、總計實に十億ドルを突破してゐるのである。このほかアメリカが世界の各部に向つて投資してゐる金額は、また莫大なもので、ヨーロッパへは三十三億ドル、中部および南アメリカへは五十億ドルと稱せられてゐる。

この資本國アメリカも、しかし、ながきに亘つて世界的不況の圏外にありうるわけはなかつた。果然昨年末の株式の暴落を期としてアメリカの經濟的機構は、徐々ではあるが蔽ひつくしがたき動搖を始めた。この動搖が今後のアメリカをどう着色せしむるかは後段に述べるところにゆづり、私は次に、最近十數年間に亘つてその黄金期を劃したアメリカの特色ある産業文明について、この物語を進めてゆきたいと思ふ。

(三)

一九二六年はアメリカにとつて劃期的な年であつた。それは次の年に同國政府が數字をもつて發表したやうに『世界の歴史上いまだかつて達せられなかつた最高の生活程度がこの年にアメリカ人によつて達せられた』からである。この時アメリカ人の國民所得の總額として掲げられた數字は九百億ドルであつた。更に驚くのはこれが一人當りに割出された數字であつて、一定の職に従事してゐるすべての人の平均所得は年額二千二百ドル、日本の貨幣に直して四千五百圓であつた。シアートルの市街電車の従業員は、かつて、最低生活費の案を提出して會社側と折衝した。この時に要求された最低生活費は五人家族のもので年額千九百七十七ドル八十八セ

ント、日本の貨幣では凡そ四千圓となつてゐた。勤勞所得年額四千圓といふのは、日本人にとつては仲々大きい數字である。しかしアメリカでは、これが市街電車の従業員によつて要求されてゐたのである。

アメリカで架設されてゐる電話の個數は、一九二八年末の調査では一千八百五十三萬といふことだつた。今日では二千萬に達してゐるであらう。今年の五月の國勢調査ではアメリカの總人口は一億二千萬人、このうちニグローが一千五百萬人をり、その外にアメリカ・インディアンや東洋人がゐるが、これらを考慮に入れると、アメリカの現有勢力たる白色人口はおよそ一億となる。この數に架設電話の個數を割宛てて見ると、まさに五人につき一個の勘定となる。更に顯著なのは自動車である。

今日アメリカの乗用自動車の生産高は年四百萬臺であり、現に使用されてゐる自動車の數は、低く見積つて二千萬臺、多く見積つて三千萬臺である。ただ慥かなことは、アメリカにおける自動車の使用割合は電話と同じやうに一家族につきほぼ一臺當りの勘定だといふことである。その普及の仕方は日本における自轉車と同じ、或はそれ以上である。小さな素人下宿屋の主婦でさへ氣の利いたビュウイツクかフォードを持つて、日曜には下宿人をうつちやらかして置いて遠乗りに出かける。それは彼女にとつては奢侈ではない、必要な人間生活の一部分なのである。

私がアメリカを訪ふたのは今年の夏、どの大學も夏期休暇に入つてゐた頃だつたが、シカゴ大學とアイオワ・シテイー大學とではサママー・コースが開かれてゐた。その廣々とした前庭には幾百をもつて數ふべき多

數の自働車がすらりと並んでゐるのには私も尠ならず驚いたことだつた。ドイツの大學町では自轉車がやりである。大學の門前は學生の乗り捨てた自轉車が林のやうに並んでゐる。これがアメリカでは自働車に代る。アメリカでは學生までが自働車を持つてゐるのである。しからば日本では？ 日本の學生は自轉車さへ持つてゐない、そして彼等までが、本當に彼等までが、無産階級的意識に滲潤されてゆくのである。

ニューヨークの建物の高さは段々と高められてゆく。大西教授がアメリカを訪はれた頃は、最高の建物はワールワース・ビルディングで、その階數は五十四、尖塔の端までの高さは地上から七百九十二呎一吋だといふことだつた。今日ではこれは第二流、第三流となつてしまつた。最近に落成したクライスラー・ビルディングは更に十階を加へて六十四階となり、その尖塔の端までの高さは更に二百五十呎を増して一千四十六呎となつた。これで事實上、過去四十年間世界最高の建物として誇つたパリのエツフェル塔（それは三百メートル、凡そ一千呎である）を斷然凌駕してしまつたのである。今後十年の後、二十年の後、アメリカを訪ふ人は、更にこれよりも高い建物の林立しあるを見出すことであらう。私はアメリカにゐた間、何度街頭に突つ立つて、腕組みしながらこの魔天樓を眺めあげたか知れない。

しかし、考へてみれば、この魔天樓の高さは、慥かに初めて見るものゝ度膽を抜くには充分であるにしても、それは決してアメリカの産業文明を測定する尺度ではなかつた。建物の高さではなくて、前に述べた人間の生活程度の高さが、それを測定し標示する尺度である。實際、アメリカ人の高き生活程度は彼等の産業文明

を維持するに要する費用である。

例を醫者にとつて見る。醫者は、前には大抵、自宅の一室を診察室にあててゐた、助手などはめつたに用ひなかつた。ところが今日では、どこかの便利のよいアパートメントで診察室を借りる。借料が年に一千二百ドルから三千ドルである。そこへ氣のきいた看護婦を、少くとも一人は使はねばならぬ。それらの費用は、すべて患者に轉嫁される。しかし不思議なことには、人は却つてこれを要求する本能を持つてゐる。たとへば若し或る醫者が自宅の一室で診療してゐる、そこへ電話がかゝる、そして電話口に出るのは、手をふきふきお勝手から駈けて來る貧弱な女中の聲だとする。人は必ずや思ふだらう、この醫者は時代に應じた新知識を有しない人か、世間から顧りみられない全く無能な人であると。

アメリカにゐた間に私はある醫者と知合になつた。彼れは私にかういふ話をしてきかせた。彼れは高き經費をかければ結局患者の不利益になることを知つてゐた。彼れは患者の利益のために、出来るだけ經費の節約をしようとした。ところが或る患家では彼れにかう云ふた。私の家へ診察に來てくれるときは、もつと素晴らしき自動車に乗つて來てくれと。かうして彼れは結局、自分の門前に雀の巢をはらしめざるがために、最新型の自動車をもう一臺買入れる必要に迫られたといふことである。

アメリカ人が近年廣告のために費やす金額は年々十億ドルを超えると云はれ、エドワード・ボツクスの計算によれば十二億八千萬ドルとなつてゐる。十二億ドルと云へば日本の貨幣で二十五億圓、日本の豫算總額の約

二倍にあたる額である。この莫大なる費用もまた、彼等の高き生活程度の一要素となつてゐるのである。

(四)

ヨーロッパからアメリカに渡る船の中で、あるアメリカの青年が私をとらまへて『君は日本の學者だといふ噂さだが、一體給料はどれほど取つてゐるのか』と尋ねた。人に給料の高をきくのは、アメリカ人の間では無作法でないらしい。人を評價する標準はアメリカでは“what he is”ではなくて、“what he does”或は“what he has done”である。さうしてこの標準は事實上、彼れが受取るところの所得の高によつて表現される。だからこの青年が私をとらまへて、私がどんな人間であるかを所得の高によつて決めようとしたのは不思議でない。私は、だから正直に、私の人間を判断してもらふために、この青年に答へた『年額千ドルだ』と。『なに千ドル？』と青年は云ふた——千ドルならば、アメリカではコツクでさへもが取るよ。』

話のついでだから、こゝで一つアメリカ人のために、その冤罪をそいでおかう。人は時にアメリカ人を評して云ふ、アメリカ人ほど露骨に金をほしがる國民はないと。これは少し可愛相である。金は上手に集めるけれども、アメリカ人はまた、これを散ずる術を心得てゐるからである。實際、世界の富豪のうちでアメリカの富豪ほど金銭に淡泊なものはない。自分の苦心して集めた金を、彼等は惜し氣もなく持出して、慈善・教育・傳道・科學研究の諸事業に投ずる。だからアメリカ人は云ふ。『すべての種類のゲームにおいて吾々を動かす

ものは、それを計る counter に對する愛好ではない、ゲームそのものへの愛好である。さうしてビジネスはすべての吾々のゲームのうち最大のものである。ドルはこのゲームを計る counter に外ならぬ』と。

話は元の青年との對話に戻る。私はその後アメリカにおいて、アメリカ人の國民所得は決して均衡を保つてゐないと云ふ一事を發見した。アメリカは如何に巨額の國富を藏するとは云へ、すべての人の勤勞が一樣に高く支拂はれてゐるのではない。最も高く支拂はれてゐるものは産業および運輸に従事しつゝあるものであつて、たとへば教師、たとへば牧師は決して豊かには支拂はれてゐないのである。私は前にシアートルの電車従業員が年額千九百ドルを要求したことを述べた。更に貨物列車の車掌は三千七百五十ドルをとり、機關手はおよそ四千七百ドルといふ高給を取つてゐる。のに反し、アメリカの牧師の俸給は全國を通じて年額僅かに七百三十五ドル、學校教師のそれは東部および中部諸州の平均で八百七十ドルである。この収入は教師や牧師の生活を充分に支へ得ないことは明かである。

大學の教授はこれに比すれば遙かに優遇されてゐる。しかし事情はこゝでも全く同じい。近年キャリアフォルニア大學がその既婚の教授九十六家族について調査發表せるところによると、この家族の半分は僅かに一人の子供を持つてゐるか或は皆無かである。そして九十六家族全部の平均では一家族あたり僅かに一人半の子供である。こゝでは、家計の困難のために二兒制すら行はれてゐないのである。更に立入つて考察してみると、彼等の俸給は年額一千四百ドルから八千ドルの間であつて平均三千ドルになつて居るけれども、その俸給は全

生活費のうちの僅か六十五%を占めてゐるにすぎぬ、残りの三十五%は彼れまたは彼れの妻君が内職で儲けてゐる。妻君が働いて家計を助けてゐるのは九十六人の教授夫人のうち三十八人までである。一番目宛てにされてゐる教授の特別の仕事はサムマー・コースである。しかし彼等はこれによつて貴重な休暇を捧に振つてしまふ。貴重な、といふのは、この休暇こそ學者に與へられた唯一の、自己反省と學問精進との時間であるのだから。因みにこの調査の結論では、教授が一家を支へて、自分の専門の仕事の上における能率を少しも害せず働さうる最低額の俸給は年七千ドルといふことであつた。

大西教授の輝かしかりしアメリカ合衆國の文明批判は、一言に盡せば、『アメリカは文明高きに拘らず文化進まずと云ふ通説にかへて、アメリカは文明高きが故に文化進まざるなりと主張するを要す』と云ふにあつた。この犀利なる觀察は、その後十幾年かの歲月が流れて、建物の高さは益々高く、汽車電車のスピードは益々速く、さうしてアメリカ娘の唇は益々赤くなつたにも拘らず、今なほ依然として正しさを保有してゐるやうである。私は今これとは異なる觀點に立つて、以上掲げた諸事實から、次のやうな論斷を下しうるかと思ふ。曰く、アメリカ人の高き生活程度によつてかち得られたものは物質的なものであり、失はれたものは主として精神的なものであると。疑ふ人は先づ、次の顯著なる諸事實に一瞥を投ぜらるゝがよい。

(五)

今世紀の第一四半期末の調査によると、世界における機械的發明においてはアメリカは斷然世界をリードしてゐる。即ちこの二十五年間に獲得された新案特許の數は

アメリカ 一、三九七、〇〇〇件

フランス 五九四、〇〇〇件

ドイツ 三六五、〇〇〇件

時の商務卿フウヴァーはそれ故に傲語して云ふた。『吾々は今世紀において、歴史上比類するものなき程度に工業技術上の研究を進めた』と。これと並んで見るべきはノーベル賞の受賞者である。ノーベル賞は創始されてからもう三十年になるが、この間、アメリカ人に與へられたのは前後五回、即ち物理學で三人、化學で一人、醫學で一人である。これは必ずしも誇るべき數ではない、しかし他面、文學および哲學においてはただの一回もアメリカ人に與へられてゐないのである。()と、書き了へてしまつたところへ配達された小樽新聞の十一月六日の夕刊は、ストックホルム五日發電として、一九三〇年のノーベル文學賞はアメリカ人シンクレア・リュイスに授與された旨を報じた。これで苦節三十年、漸く一點獲得といふことになる。()かういふやうに、工業上の發明が世界に冠絶し、自然科学的研究が比較的優勢なる半面に、哲學文學において未だ世界の水準を抜くべき人を出さざるの事實は、果して何を物語るものであるか。それがアメリカにおける謂ゆる Machine Age の所作であることは、聊かの疑ひをも容れなす。(Beard, The Rise of American Civilization, N. Y. 1930,

2nd vol., pp. 754—757.)

活動寫眞についてはアメリカ人は慥かに進歩してゐる。レビューもまた、とてもパリあたりでは見られないほどの思ひ切つた藝當を見せてゐる。しかし、音樂はどうか。アメリカは依然として音樂の沙漠國である。なるほどデヤズはアメリカの專賣特許であるらしい。しかしこれも、もとをただせばチューインガムと同じやうに、アメリカ・インディアンの、更にさかのほればアフリカ土人の、郷土音樂から盗んで來たものである。オペラはどうか。上演されるものはすべてヨーロッパ産である。美術品は金にまかせてヨーロッパから買込んで來るが、人はこれを鑑賞する眼をもつてゐない。フォードはかつてレムブランの繪を見た、さうして云ふた。『これは一枚か、一枚で何になる？』と。寺院を建てる、技師はイタリアから來る。地圖を畫く、技師はオーストリアから招聘される。アメリカはかうしてドルにかへて、精神的なるものの供給を依然ヨーロッパに仰ぎつゝある。

世界における書物の出版は、その絶對數において最高を占むるは現在のロシアである。それに次いでドイツが第二位となつてゐる。アメリカおよび日本は近年その數を著しく増しつゝあるが、人口一萬に對して出版された書物の數は、デエームス・ツラストロウ・アダムスの記すところによれば、

デンマーク

一一・四

ラトヴィア

九・五

オランダ	九・〇
ドイツ	五・二
ノルウェー	四・七
フランス	三・八
イギリス	三・〇
アメリカ	〇・八五

この数字はやゝ古いが、これによつてもアメリカ人の知識の一般的水準が如何に低いかの一斑が察知されよう。(James Truslow Adams, *Our Business Civilization: Some Aspects of American Culture*, N. Y. 1929, p. 156.)

實際アメリカ人はその高層建築に反比例して、近代の大國民のうちではその精神生活において最も低級である。彼等は一般に教養がない。高い建物は競ふて建てるが、その下の街路は、古新聞と煙草の吸殻とチューイングガムの滓とで充満してゐる。如何にスピードは早いにしてもその地下鐵道の汚なさ、不潔さは正に天下一品である。車内に入ると肉太の大きい禁札が掲げてある。曰く、『車内にてつば吐くべからず、犯したるものは一年の體刑、五千ドルの罰金、またはその兩者に處すべし』と。富裕と壯大においては世界一と誇稱するニューヨークの町の眞ん中でも、かう嚇おどしつけねば秩序が保たれないのがアメリカである。

ジョン・アダムスは一七七四年にニューヨークを見て、その日記にかう記した。『この都市のすべての富裕、

毫壯にかかはらず、人間のよき教養は殆んど見出されない。人々のかはす會話はすべて不愉快なものばかりである。それには節度がなくて下品で、お互に他人への注意など一向に拂はない。彼等は矢鱈に大きい聲で、早口で、そして皆んな一度にしゃべりたてる』と。これは今でもなほ、不幸にして眞理である。

アメリカの法例は聯邦、州、および市の三者の間に混亂するものが尠くない。たとへばニュー・ロンドンからプロヴィデンスへドライブするには一時間三十マイル以上ならば罰金、しかるにロード・アイランドに入ると、そこでは三十マイル以下ならば處罰とされてゐる。酒や煙草についてもこの種の混亂は數少しとしない。それに加へて犯罪は、またアメリカの名物である。

アメリカにおける犯罪の常道は二様ある。法律のもぐりと暴力がこれである。法律のもぐりの最たるものは脱税行爲である。ニューヨークの貿易商のうち正直に輸入税を支拂つてゐるものは百人のうちの十人で、残りの九十人は脱税してゐると云はれてゐる。暴力による犯罪は殺人と強盜である。一九二八年の秋ニューヨーク・テレグラムは恐るべき犯罪を報道した。これによると、シカゴの或る無賴漢は、一回も檢擧さるゝことなく、二年間に二百十五人の殺人をしたことを吹聴した。ニューヨークでは今日なほ、百五十臺のいかめしい装甲自動車^{armored car}が、銀行と銀行との間を日々に往復してゐる。云ふまでもなく、白晝と云へども喰はされる^{held up}の災厄に備へんがためである。さうしてかやうな装甲自動車の活動は、戦時または内亂の場合を除いては、平素はいかなる他の國にも見られないところである。

(六)

以上の事實に向つては、恐らくこゝに一つの辯疏が現はれうと思ふ。それは、アメリカ人はまだ若い國民だといふことである。なるほどアメリカは、その獨立を確保してからまだ百五十年にしかならない。百五十年の歲月は一國を創建するには決して長い期間ではない。しかし、たとへば古いと云はるゝイタリアはどうか、ドイツはどうか。イタリア帝國はやつと一八六〇年に創建されたのであり、ドイツ聯邦は一八七〇年に一帝國に融合した。アメリカの建國に比すれば、これらの國々は却つて若いと云はねばならない。のみならず、十七世紀このかた波高き大西洋を渡り切つて、イギリスからドイツから、フランスからイタリアから、スウェーデンからオランダから、うしほの如く新大陸を目ざして押しよせて來た人達は、鬱勃たる雄志を抱く開拓者の精神の所有者でこそあつたれ、決して、野蕃草昧の民ではなかつた筈である。

だから右の辯疏は意味をなさない。アメリカにおける如上の、精神的なるものゝ缺如は、それゆゑに、物質的なるものゝ獲得による代償と見ねばならない。高き産業文明はかくして、精神的なるものゝ喪失によつて購ひ取られたのである。

私は前に、アメリカ人は神と傳統とに仕へる『中世型人間』から金と産業とに仕へる『ブルジョワ型人間』への轉化を、またたくうちに完了しおへたと述べた。これは一面には、全人口中に占むる農民數の著しい相對

的減少によつて表象される。アメリカの農民の數は一七九〇年には全人口の九十%を占めてゐた。ところが、この割合は近年に至つて激減して、一九一〇年には三十六%となり、更に一九二〇年には二十九%となつて、今やアメリカの産業および人口は殆んど商工業に集中されたかの如き觀を呈してゐる。

かやうな産業界における基礎的移動は、やがて事業家をしてその國の支配的階級たらしむることにより、一般社會の觀念形態を推移せしめねばやまない。だからアメリカの事業家のもつイデオロギイは、そのままアメリカ人のイデオロギイだと解して大過はない。たとへばこゝに *leisure* (閑暇) の意義についての彼等の解釋がある。

およそ人類の文明は最初エジプト及びバビロニアに起つた。理由は、この國々では初めて、一人の勞働によつて造らるゝ食物はその一人の人の必要を充たしてなほ餘りあり、しかしてこの餘剩食物が、一小有閑階級 *leisure class* の創造を可能ならしむるに充分であつた。そして、著述、建築術、算術、天文學、および他の、すべての後代の文明に缺くべからざる技術を發明したのは、まさしく、この小有閑階級であつた。これは吾々の歴史が教ふところである。私は今この特定階級の必要を説くのではないが、この閑暇 *leisure*こそは何等かの仕方、常に人類と共にあらねばならぬ。なんとすれば、人類の文明とは結局、生存のために生物學的に必要なもの以上の追求に外ならぬからである。一人の人間の勞働が彼れ一人の生存をやつと支へるに要するものを造りうるにすぎないならば、未來永劫、人類の文明は發生し得ないからである。

ところが、これを純粹に事業家の見地から見ると、それは次の仕事における個人の生産的能力を促進するものでない限りは、或は促進するに役立つものでない限りは、全く無駄であると考へられる。だからアメリカの事業家たちは、眞の意味の *leisure* を理解しない、これを直ちに怠惰と同視してしまふ。たとへば『アメリカの前兆』*American Omen* においてギヤレット氏が *leisure* について論じてゐるところは、まさしくアメリカ式の新實業道德の一つの典型的な表現であるだらう。彼れは云ふ。『アメリカ人は怠惰に關與することを知らない。彼れはそれを了解しない。一般に怠惰はアメリカ人を殺してしまふ。』更に彼れは成人教育について云ふ。『成人教育の趣意はイギリスにおいては賃銀労働者に、彼れの閑暇ひまな時間を費やすための教養上の趣味を、たとへば自然研究、天文學、化學、物理學、文學等を供する。ドイツにおいてはその趣意は技術の習得にある。フランスでは特筆すべきものはない。しかし』——と彼れギヤレットは、勝ち誇つたやうな口調で附加へて云ふ——『成人教育のアメリカの理想は、人をしてその職しごとにおける、より大なる自己表現を見出さしめんとするにある』と。

しからば資本家對労働者の關係はアメリカにおいてはどう現はれてゐるか。アメリカの産業的繁榮はこゝでもまた、極めて特色的な様相を展開せしめた。アメリカにおける謂ゆる經濟革命——労働者の資本家への轉換が即ちこれである。

(七)

トオマス・ニクソン・カアヴァーは現にハーヴァード大學の經濟學教授として令名高き人であるが、彼れはアメリカにおけるこの新事實を看取して世の注意を喚起した。『アメリカにおける現時の經濟革命』（ポストン、一九二八年）といふ一書がこれである。

これによると、アメリカにおける富は昔に急速なる步調で増加しつつあるのみならず、以前には憐れまれた労働者の賃銀が昇騰してゐる。労働者は資本家となり、産業上の繁榮は益々廣い範圍に頒布されてゆく。これは人類の歴史上いまだかつて現はれなかつた劃期的な新事實である。労働者と資本家との距離は、これによつて漸次縮められてゆくがために、階級意識は消えうせる。そしてこの階級意識の消滅と共に、吾々が今労働問題と呼ぶものもまた消滅する。労働者および労働組合の採るべき戰術は、それゆゑに、資本家との闘争ではなくて、それとの固き握手である、と。

これがたとへば自動車王のフォードが説くのならば、一向に吾々の問題とはならない。（たとへばその著 My Philosophy of Industry を見られよ）。しかし名のある經濟學者の説くところだけに吾々は一層の興味を覺えるのである。そこでカアヴァーはどういふ根據によつて以上の所説をなしたかと見るに、それには次の三つがある。

一、貯蓄預金の急速なる増加

二、労働者の株式資本への参加

三、レエバア・バンク（労働銀行）の發展

アメリカにおける貯蓄預金の總額はなるほど大きい。殊に最近の數年間にはその總額は著しく増加し、大戦勃發當時のそれと比較するとおよそ三倍に膨脹して居り、更に預金者の數は一千萬人から四千萬人に、即ち四倍に増加してゐる。この一事は、たしかにカアヴァーの云ふところを裏書してゐる。富は増加したと同時に、それが一層廣い範圍に頒布された一つの證左と見てよい。

株式資本への労働者の参加もかなり廣い範圍に行はれてゐる模様である。しかしアメリカにおける労働者階級の實力を示すものは、そこに特殊な發達をとげたレエバア・バンクにまさるものはない。一九二〇年にワシントンで設立されたものが最初で、翌二一年には四行となり、二二年には九行となり、二三年には十七行となり、二四年には一躍して三十三行となつた。カアヴァーはこの形勢を見て一九二五年末までには總計七十五行とならうと豫想したほど非常な勢ひで設立されて行つたのである。しかし今日、一九三〇年度のワールド・アルマナックを披いて見ると、純粹のレエバア・バンクとして存続してゐるものは二十一行にすぎず、その資本金は總額六百六十八萬七千五百ドル（邦貨約一千三百四十萬圓）である。

本年に入つて漸くその創立計劃の機運に向つたといふべき、或は少くともそれが問題になりかけて來た日本

に比べては、これはたしかに、アメリカ労働者の貯蓄力甚だ大であり、且つ企業的精神の頗る旺盛なる證左として吾々の注意をひく。カアヴァーはその發展の將來を豫斷して、『十年の後には世界の支配的金融力の一つとならう』とさへ云ふた。これは然し、容易に信じがたき豫斷である。現に最近の數ヶ年は新規の設立を見ないばかりでなく、經營困難となつて途中で資本家の銀行に買收されたものもあり、一般にはむしろ停頓の状態にある。資本金總額六百七十萬ドルは、労働者の手になつたものとしては一つの驚異である。しかしこの金額はアメリカ全國の金融資本と對比するまでもなく、たとへばナショナル・シティ・バンクの資本金一億一千万ドル、チエース・ナショナル・バンクの一億五百萬ドルと比べて見ればよい。二十一行全部のレエバ・バンクを合してもその資本額は、この一つの大銀行の資本額の十分の一にも達しないのである。

ただし、吾々は、アメリカにおける労働運動が近年その闘争的方針を改めて協調的態度を持してゐる一事を見のがしてはならない。レエバ・バンクの存在はその一つの證據であるが、それよりも更に顯著な事實は、労働争議が近年ほとんど全く影をひそめたことである。これについては詳しい數字があるけれども、今はただ、かつては一ヶ年に六百件に近い争議を起した金屬工業は一九二八年には僅かに二十八件、四百件に近い争議を起した鑛山業が八十三件に激減した事實を示すにとどめる。實にアメリカは世界において、労働問題が悪化せず、社會主義が榮えない唯一の國である。何故であるか。

アメリカでは産業に従ひつゝあるすべての階級が満足してゐる。その主たる理由は、彼等が繁榮してゐること、即ち豊かに支拂はれてゐることである。勞賃は、より高き生活費を考慮に入れてもイギリスにおけるよりも高い。そこで問題は、アメリカの繁榮は一體何に基づくか、および、その原因はどの程度の永續性を有つか、といふことである。

アメリカの繁榮については凡そ次の四原因を擧げることが出來よう。

- 一、アメリカのもつ莫大なる自然の富源
- 二、アメリカ資本家の精力と能力、殊に近年における産業合理化の完成
- 三、新開國の特色たる、保守的諸傳統の缺如
- 四、成人移住者の渡來、即ち彼等は養育および教育の諸費用を費やすことなくして、彼等の勞働を提供し得たること。

しからばこれらの諸要素はどの程度の永續性をもつか。第一に自然の富源はある程度に用ひ盡されるであらうし、これと對比される人口は漸次に増加するであらう。第二に資本家は、從來は多く獨力でその富を造つた人々であつたが、追々この種の人達を減じて、相續によつて富を得た人々となるであらう。かうなると、

かゝる資本家の演ずる精力と能力とは萎縮して来る。第三に保守的な傳統は、人口が益々定着して来るに従つて、漸次に發生し増加して行くものと看做される。第四に移民は、既に制限された。かくして移住者が全人口のうち占むる割合は漸次に減じて、アメリカ生れの市民の數が益々殖えて行くだらう。

かく考へてみると、アメリカがもつ現在の利益、即ちアメリカ繁榮の諸要素は決して永續的なものではなく、むしろ多くは一時的のものと考えざるを得ない。しかしてアメリカ労働運動の協調的態度はこの産業上の繁榮と共にあつた、少くとも學者の勞資協調論はこの繁榮期において成立の可能を與へられた。だがこの繁榮が止むと共に、或はこの繁榮が妨げらるゝときに、——即ち産業が萎縮し失業者が續出するときに、人は何を考へるであらうか。私は思ふ、アメリカの産業文明は今や既に一轉期に面しつゝあると。

これと關聯して吾々の注意をひくのは、アメリカ人のもつ猛烈な Nationalism である。その口で説くところには反して、執拗な排外的 Nationalism を持するものはアメリカ人である。

この Nationalism は本來、群團本能の一發展である。周知のやうにマルクスは世界の歴史をもつて主として階級闘争の歴史と見た。即ち封建貴族はブルジョワジイに、ブルジョワジイはプロレタリアートに場所を譲つたと考へ、人間の群團本能は彼れの國または國民よりも彼れの階級に向けられることを豫期した。『萬國の労働者よ、團結せよ』は、つまり、無産労働者をして、彼れのもつ群團本能をば彼れの祖國から彼れの階級に轉向せしめようとしたマルクスの勸告であつた。今日までのところこの勸告は、這般の大戦が示したやうに決して

成功はしなかつた。尤もこれがいつまでも不成功に終ると考へるのは、人類の意思を餘りにも侮辱したことであるが、少くとも今日までのところ、その實現には大きい困難が伴つた。アメリカ人のもつ Nationalism はその一つであると云へよう。

かまで多種多様の民族の集合であるに拘らず、アメリカが強烈なる Nationalism ——それを裏付ける強い愛國心をもつてゐることは、實際、不思議な位である。アメリカを旅する人は、彼れが鈍感な觀察者でない限りは、必ずやこの事實を見のがさないであらう。しかしてこの強度の國民的意識こそは、アメリカをして這般の大戦に第一級の努力をなさしめたものであり、また今日、世界帝國としての巨歩を、かつてスペインや、フランスや、またドイツが企てたとは餘程成功の望みある仕方、踏み出すことを得せしめつゝある原動力でもある。

その理由の主なるものゝ一つは、アメリカのみのもつ特殊な事情である。そこに渡來した移住民は、もとをたせば、經濟的か政治的か或は宗教的の壓迫のために、彼等の祖國を捨てて來た人々である。アイルランド人、イタリア人、南斯拉ヴ人、ロシア人、ユダヤ人等、等。これらの、母國において迫害された逃避者に對して、アメリカの新世界は自由と愉樂とを保障した。政府は信教の自由を許し、白人間の人種的差別は顧みなかつた。移住民はかくして、彼等をして國外に遁れ去るを餘儀なくせしめた母國に對して何等の執着を持たず、却つてこれに悪感情を抱けば抱くほど、自由國アメリカは地上の樂園に見えたのである。アメリカは正に、先

天的には存せざるべき愛國心を、人爲的に製造するに成功した一實例である。

(九)

私はこの物語をばかういふ觀點から始めた。世界の歴史を動かすには二つの力——Industrialism と Nationalism とがあること、更にこの Industrialism には資本主義と社會主義との二形態があり、Nationalism には帝國主義と民族自治の要求との二形態があること、および吾々のアメリカはこのうち資本主義と帝國主義とを選び取つて、これを最尖端にまで高揚しつゝあるといふこと、がそれであつた。私は今、迂回の途をたどり來たつてこゝに漸く、結論的部分に到着したやうに思ふ。

ある機會で私は、世界は將來三分されるのではなからうかと述べた。第一はアメリカ合衆國による南北アメリカの支配、第二はロシアによる全アジアの支配（但し日本を除く、としよう）、さうして第三はロシアを除く全ヨーロッパの聯盟で、ジブラルタル海峡を閉鎖しての地中海とアフリカとの支配である。ロシアによる全アジアの支配は、支那および印度における動亂に注視するものにはその萌芽が看取されようし、またヨーロッパ諸國の聯盟は既に具體的な討議にまでその機運は熟してゐるのである。さうして、ヨーロッパ諸國をしてかかる自衛策——それは寔に一つの自衛策である——を取らしむるに至つた直接の原因は、云ふまでもなく、アメリカ合衆國の帝國主義であつたのである。

諸種の事情を綜合して、アメリカが次の『世界帝國』となるであらうことは容易に想像されうる。アメリカは自から、今日までのところ、かゝる地位の獲得を標榜してはゐない。だが事實上は然かなりゆきつゝある。第一にアメリカは、平時および戦時の必需品を全部自給しうる唯一の國である。その豊かなる自然の富源は、アメリカをして世界帝國への實現の可能を保障する最も有力なる基礎である。現にアメリカは高き關稅の障壁を設けて外國品の入り來たることを防ぎ、宛然、經濟的鎖國の狀を呈しつゝある。

第二にアメリカは、ロシアを除いてはどの國よりも大なる白色人口をもつてゐる。この白色人種が有色人種に比べて遙かに勝れた技能と精力とを持つてゐるかどうかは問題であるが、この人種が現在の世界を支配してゐることだけは慥かである。分けてもアメリカ人は尊大な國民である。ある雜誌通の語るところによれば、アメリカではアメリカに關する記事のほかは雜誌に載せられない、載せても人が讀まないといふ。多數の讀者にとつてはアメリカだけが人間の住む世界なのである。

第三にカナダは、將來戦争が起ればアメリカの味方とならう。それは單に自己保存の理由からである。しかばメキシコは？ 彼れもまたアメリカに矛を向ける國ではない。メキシコは事實上、アメリカ金融資本家の支配下にある。ゆゑに將來、たとへば第二の世界戦争が起るとせば、北アメリカの全部は躊躇なく合衆國に屬するものと考へねばならぬ。

第四にアメリカは、戦争の勃發の際には急速に、如何に精銳なる海軍力をも粉碎しうる程の有力なる海軍力

を組織することが出来る。それに加へて、第五にアメリカは、世界各國の債權國である。更に第六にアメリカ人は、その表面的な節度と、賢い點においてはイギリス人をさへ凌駕してゐる。その偽善の巧みなる使用には、アメリカ人自身でさへもだまされる程である。

かういふ諸要素を結合したアメリカには、おそらく現存の如何なる國家も勝味はない。だから、眼先きの見えるイギリスの政治家は、アメリカとの親善をもつて一強國としてのイギリスの存在のために不可缺の條件と考へてゐる。従來の戦争で勝利をもたらしたイギリスの海上並に産業上の優越は、アメリカと矛を交ふるやうな場合には全然存在しないこと、従つてまた、アメリカと戦はねばならぬやうな場合には、たとひ日本と同盟するにしてもその局は容易に有利に展開しないであらうことを、彼等はちやんと心得てゐる。だからイギリス人は明かに云ふ。『吾々の政策は、それ故に、いかなる犠牲を忍んでも出来るだけ、アメリカとの親密さを保つことであらねばならぬ』と。(Russell, *The Prospects of Industrial Civilization*, N. Y. 1923, pp. 82—83.)

アメリカは世界を支配するのではなからうか。そしてこの状態は續くだらう、ロシアが隆盛となるまで、ヨーロッパが結合されるまで。

人類の將來は、次の半世紀の間のアメリカの行動に依存する。もしアメリカが今日示してゐるやうな資本主義的帝國主義の軌道に従つてその猛進を續けて行くとせば、世界の残りの國々の反感をそそり、新世界の富と舊世界の貧との間の隔たりは益々巨大となり、擄取され支配されてゐる諸國民の間には次第にアメリカに對す

る憎悪の念が燃えあがり、遂には社會主義者の指導のもとに世界的な叛亂が起つてアメリカへの債務の拒否を宣言するであらう。この場合盟邦イギリスがどちらに加擔するか知らないが、いづれにしてもその對立的勢力が大であるだけそれだけ、戦ひは大仕掛であつて非常に長い年月を要し、さうしてその終局は、ヨーロッパの側ではその固有の古い文化をすつかりこわしてしまふ結果となり、アメリカでは、今まで抑壓されてゐた國內における社會主義の擡頭となるであらう。それは高度資本主義國アメリカの終焉であり、同時にアメリカの歴史における第三段の轉化を意味する。――

私のアメリカ物語はどうかやら夢物語に變つてゆきさうだ。このあたりで終ることにしよう。

私が見たアメリカ合衆國

一〇六